福山大学工学部紀要
第7号　1985年3月

フランチェスコ　ディ・ジョルジョ　マルティーニの都市、建築論とアリストテレス哲学との関連性について

松　本　静　夫*

On the Relationship between Francesco di Giorgio's Urban & Architectural Theory and the Aristotle's Philosophy

Shizuo MATSUMOTO

ABSTRACT

Francesco di Giorgio Martini (1439–1501) is one of the trattatist on architecture and military architecture in italian renaissance. There remain several manusciprts which are his own hand and other's, among which the latest ones–codice Magliabechiano II.1.141 (M) and codice Senese S.IV.4 (S) –reveal his matured way of thinking. Therefore on this paper the relation between his thought and Aristotelian philosophy concerned with these two codices is considered, because there are many phrases cited from Aristotle's Metaphisica, Phisica, Ethics etc.

The conclusions of this paper are next ones:

1) His point of view is, generally based on the Aristotelian Philosophy, that the human life is always oriented to the good and the truth in the ordinary life, the real life, not in the world of after death, so his practice and fabrication also oriented to these good and truth.

2) His motif of these manuscripts is to give the universal point of view on architectural theory, so the method is, like Aristotle's, based on the inductive and positive way which is guided from the individual phenomena, individuality to the universal, universality. In this meaning the structure of his manuscripts has, influenced by the medieaval christian teology, the dual polar structure, but also has the dynamic and open structure.

3) The meaning of his term "l'arte antigrafica" is the art to give principles on the architectural theory, both on the theory and technology, criticizing the phenomenal problems.

1．序

イタリアルネサンスにおける，ブルネレスキ，アルベルティ，ブラマンテ等の著名な建築家達の陰で隠れた存在であるフランチェスコ　ディ・ジョルジョ　マルティーニは1439年シエナで生まれ1501年にそこで一生を閉じている。彼は建築，軍事建築の実践的な面において多大な業績を残しているだけでなく，建築，都市，軍事建築に関する理論書を残している。しかしこれは出版されることなく，手稿として残存し，彼以後の建築，軍事建築家，理論家達に多大な影響を与えている。特に彼の手稿の写本の多さがこのことを物語っている。[注1)]

デイ・ジョルジョに関する最初の研究はC．プロミスによって端緒が開かれるが，彼の研究も含めてこれに続く一連の研究は主として彼の活動，作品，手稿の年代考証，自筆手稿と写手稿の鑑定，あるいは技術的，実践的理論に向けられている。このような研究における狭い意味での正確さを求める方法は彼の思想，理論のより広い

* 建築学科

意味での示唆と意味を隠蔽してしまう。かれに関する研究のなかで上述のような観点から彼の理論を再解読する試みはこれまでW．ウィットカウァーの比例論的研究とL．ローウィックの人体類比の意味と意義についての研究以外にはなされていない。[注2)]

従って，ここではディ・ジョルジョの最後期の手稿である'Codice Magliabechiano Ⅱ．141;Bibl. Nazionale di Firenze''Codice Senese S．Ⅳ．4;Bibl. Comunale di Siena'[注3)]という二つの手稿にみられる，古典ギリシア思想およびキリスト教思想の影響，特にアリストテレ哲学が彼の理論に与えた影響を考察する。

1．論理構造と方法

中世において忘却されてしまったL'arte antigraficie ; arte del disegno あるいはArchitettura の意味の本質を探求するためにイタリアルネサンスにおいて犯されている多くの誤謬と失われた意味を遺跡と原典に依拠することにより再解釈する，このことがディ・ジョルショの手稿の執筆の動機である。この彼の展望は古代の建物に関する彼の論及の理論的批判的傾注，豊富な発明と創造性に結びつけられるものである。この動機を展開するための展望を構造化し，当時の知識人に説得力を持って語りかけるためには，古代の権威，哲学的論理的構造においてはアリストテレス，建築理論においてはウィトルウィウスに特に依拠している。従ってここではそのような典拠であるアリストテレスの哲学と彼の理論との関連性と差異性について考察する。

彼はM－Sの序文においてこの動機を次のように述べている。

> "多くの混乱した状況の故に，古代ローマとギリシアの優れた彫刻家，建築家の作品を彼等によって用いられた言葉との一致を検証するために・・・全く新しく・・・古代の諸作家について・・・叙述することの力を再び見いだすことが必要であった。・・・"及び，"幾人かの人々が現在この術に関してのべ著していることを知らないわけではないが，結局は有益で難解な章句を軽率に扱っているように思われる。" "イタリア全域に残存している古代の建物や彫刻の数少ない遺物とウィトルウィウスの著述との一致を実証することにあった。"（M－fgl. 1v－2；S－fogl. 1－2）

ディ・ジョルジョがこの術に関する現実の事象の混乱を解明するために古代に遡ることにより実証的文献学的に探求するという方法を採用していることはアリストテレスからの多くの引用，言及，あるいはその解釈に裏付けられたものである。アリストテレスは"形而上学"において"すべての人間は，生まれつき，知ることを欲する"[注4)]とひとまず措定したうえで，感覚的知覚（aisthesis），記憶（mneme），経験（empeiria），技術（technē），学問（epistemē）という一連の知性の階層的秩序をたてる。この手続きは現実の個としての事象（実体（ousia），より多く可知的なもの）を各人の感覚に直接自明な客観的実在として前提し，この事象の直感から出発することにより，この事象の外，あるいは別の事象の内に探求するのではなく，この事象に即して，事象そのもののに内在する本質（端的，自体的に可知的なこと）を探求するものである。

この意味において彼の哲学は，ある意味で帰納的手続きを前提にしていると言われる。[注5)]ディ・ジョルジョもまた，彼に導かれて現実所与から観察分析を通じて概念（理論）へといたる帰納的手続きである実証的探求の道を採っている。

このような手続きを採用した上でディ・ジョルジョは彼の主題とするarte antigrafica について次のように述べる。

> "現在他の多くの機械的技術より下位に置かれているけれども，発明，思考の説明，軍事技術等のあらゆる人間的行為において・・・いかに有用であり必要であるかを考えたことのある人は，容易に正当な理由でそれがあらゆる認識と実用物の制作において必要な方法であることを評価するであろう"（M－fogl．1；S－fogl．1）

周知のように，アリストテレスは認識的な広義の学を理論的（theōretikē），実践的（praktikē），制作的（poiētikē）体系に三分し，その序列を定め理論的な体系を第一の場に置いている。[注6)]さらに彼は理論的な学の目的は真理であり，実践的な学の目的は行為であり，実践的な学は永遠なものではなく，相対的なものや今ある物事を理論化する学であると述べている。また"それ以外の仕方においてあることのできないものごと"を認識することが理論的な学であり，"それ以外の仕方においてあることのできるものごと"[注7)]を認識する学には実践の領域に属する学と制作の領域に属する学があるが，両者の違いはものを生ぜしめること（生産（genēsis），制作（poiēsis））にかかわる技術の有無にあるとする。この技術とは"あるとあらぬとの可能な，そしてその端緒が制作者に存していて作られるものにはないような事物"[注8)]をいかにすれば生じさせ得るかを理論化することであると述べる。技術自体は更に上述のように経験と学に関連づけられる。まず経験との関連においては，物事を識別認知させる感官知覚と記憶の結合によって生まれ同じ事柄についての多くの記憶によってもたらされる経験が与える多くの心象か

ら幾つかの同様な事柄についての一つの普遍的判断がなされたときに派生すると述べ，経験の個別性，特殊性と技術の普遍性を明確化している。さらにこの普遍性を持つということにおいて，技術は教え得ることとして措定される。第二の学との関連において“我々の魂がそれによって，肯定とか否定とかの仕方で真理解明するところのもの”として技術，認識，思慮，叡知，直知を挙げ，これらが知の徳性とされている。従って技術は制作を介して真理解明の働きとして，知覚，記憶，経験，学問すべてに序列的に結合される。

(注9) epistēmē phronēsis sophia nous dianoētikē arētē (注10) alētheuein ergon

ディ・ジョルジョの上述の主題は従って再びアリストテレスに導かれる。彼の主題は人間の認識，制作，行為を建築という事象に即して解明するということに向けられている。こうして彼は次のように述べる。

> “〔諸学だけでなく〕諸，術，において・・・論証された真実を残してくれた人々に，さらにいくつかの〔精妙さや〕神秘についての問題を残してくれた人々に多くを負っており感謝しなければならないことを知っている。なぜならアリストテレスが，形而上学，の中で断言しているように彼等を通じて我々が真の告知に到達する始まりであるからである。”（M−fogl．1；S−fgl．1）

scienzie arti verità principio

ディ・ジョルジョはこの真の告知に到る道として歴史的過去をも配慮することの必要性を明確化している。アリストテレスの哲学も常に歴史的に遡り，諸々の哲学者の言に関して批判的に論証することにより成立している。彼は事象を解明し真理を解明することは始源的な原因についての認識を獲得することであり，それには四通りの意味であるとする。すなわち，ものの実体，その何であるか（本質），実体としての本質，換言すれば形相因，ものの質量であり基体である質量因，物事の運動がそれから始まるその始まりである始動因，物事が（それのためにあるそれ）すなわち物事の存在，生成，運動変化の目的としての原因，目的因，終極原因である。これら四原因に即して事物事象の真理が解明されるとする。(注11)

eidos hylē morphē archē telos

ディジョルジョは認識すること，すなわち真理解明について次のように述べる。

> “各認識の原理は，知性が求めるものの定義であり，その定義によって，定義されたものの本質と自然を表明するゆえに，定義することから話を始める必要がある，すなわち人間は，問題となるものを論証することによりそれについて知り理解できることである。”（S−fgl．51）

この彼の言葉のうちに，これまで述べてきた彼の方法論のすべてが凝縮されている。すなわち，それは知性の求めるものの定義，“より多く可知的なもの”から始まって，定義されたものの本質と自然，“端的自体的に可知的なもの”へと到る認識として真理解明がなされうるだけでなく，人間自身が論証による理解，認識能力を持つということに基づいている。これらのことに基づいて彼は手稿を構成する上で次のように述べる。

> “第一書では他の六書の各々において一般的ないくつかの特性（固有性）が“自然学”におけるアリストテレスの述べる，学においては個々における普遍的事柄から始めなければならないという主張に従いながら措定される。”（M−fgl．2 v；S−fgl．5）

すなわち彼の論理構造は，アリストテレスのいう“普遍的なものどもから特殊なものどもへと進むべきである。というのは全体のほうがわれわれの感覚に対してはより多く可知的であり，しかも普遍的なものはある全体的なものだからである”(注12)という章句に導かれている。この普遍的なものどもは混然たる集団を指しており，この意味においてディ・ジョルジョの方法論と一致する。従って彼の“一般的ないくのかの特性を措定する”という言葉は，事物をこのようなものとして指し示す（類的な）普遍概念である。

ここで注意を要するのは，“いかなる学（問）であれおよそ学が学であるためには，やはりできるかぎり普遍に赴くよう努めなくてはならない”(注13)というアリストテレスの主張である。かれの普遍の用語は，その間に階層性を持ちながら個別的な感覚に自明な意味から事物をこのようなものとして指し示す類的な普遍概念（本質，形相）に到るまでの重層的な二重構造を持っている。(注14)ディ・ジョルジョのこの引用も又この意味において，彼の手稿を一つの学，あるいは理論にかかわるものとして措定しようとしていると考えられる。

上述の二重構造は先に述べた彼の四因へと関連づけられる。物事の存在，生成の運動変化の目的としての終極原因は，終わりである点では物事の始まりとは反対の立場に立つ。さらに物事が生成し存在し始める点ではそれは同時に始動因でもある。アリストテレスはこの二因が形相因とも一致することからこれら三因を形相とし，質量と対置している。こうしてこれら四因は二重の重構造を持つと同時に動的構造を示す。この始動因から目的因への運動は能力，可能性，可能態と現実活動，現実性，現実態（完全現実態）という二重構造において説明される。“可能的なあるものがその完全現実態において存在し現実的に活動しているとき，しかもそのあるものそのものとしてではなしに運動可能的なものとしてそのように活動しているとき，こうした可能的存在の完全現実態

kinēsis dynamis energeia entelecheia

が運動なのである"[注15]とアリストテレスは述べる。そしてこの運動との関連において所有，所有態，状態（ヘクシス hexis）が述べられ，これはまた現実活動，状況と配置（ディアテーシス diathesis）へと連合される。この所有態に対置されるものとして欠除態ー可能態が置かれる。そしてこれらの二重構造はすべて階層的に説明されている。

こうしてすべては運動を介して現実態，完全現実態との関連において論証される。さらにこの運動を動かすもの（能動態）と動かされるもの（受動態）に関連づけ，動かされかつ動かすものは中間位にあるとし，動かされないで動かすところのものがあり，これは永遠なもの，実体，現実態であるとして不動の動者（第一原因，原理，最高善）を定立する。[注16]アリストテレスに導かれて彼は次のように述べる。

"各学が，当然，人間によって欲求されたように，・・・強い熱情を持つ人間の精神は形而上学に向かう。そこでは感覚しうるそして明白な事物によって知性（知り得ること）によってのみ認識し得る神秘的な認識へと上ってゆく，同時に生成消滅する事物的自然，運動と影響を与える天体的自然を通して，たとえ不完全ではあってもすべての他のものの第一の原因についてなんらかの知識に到達するとまさに考えられる。"（M-fgl．30；S-fgl．42v）

こうして人間を知性を介して不動の動者についてのなんらかの認識ができるだけでなく，他の事物の原理を知り得る存在とみなす。そしてこのような人間に根拠を置くことによって彼は彼自身の思想を展開している。根底においてはアリストテレスの動的構造のうちにあるが，人間を語る場合は中世の神学を経てきた彼の思想は，いずれにしても観念的な二重構造を抜け出していない。

3．類似性、秩序、差異性、有用性、必然性の理

上述のようにディ・ジョルジョは人間的存在は第一動因である不動の動者の生活，観想的生活，すなわち最高善を求め，それに可能的に近似しうる現実態としての存在であり，かつ他のものの原因原理を認識しうる中間的な存在であるとする。そしてこのことは彼の理論のうちで中心的な概念である"類似の理（ragione della similitudine）"によって説明され，このことを次のように述べる。

"人間は小世界（Piccolo mondo）と呼ばれており，生存していることにより，四大元素や諸金属と通じているゆえに自己のうちに全世界の一般的完全性を内在している；栄養摂取，成長，繁殖に関しては植物との，感覚的認識においては野生の動物との類似性が認められ，意志直感力においては天使や非物質的実体と類似性が認められる。"（M-fgl．27；S-fgl．13）

この彼の"類似の理"はアリストテレスの一般にひとはあらゆるものについてその定義を求むべきではなくて（場合によっては）ただ類比関係（analogia）を一目見るだけで足れりとすべきであるという言葉に支えられる。[注17]すなわち人間の身体としての質量と精神としての本質，形相は各々の意義や相互関係はそれぞれの事物，事例のうちに類比関係を見いだすことによって了解する以外に方途はなく，それは先の四因が終極的には広義の形相と質量に帰されることと一致する。

さらにディ・ジョルジョは人間の事物的自然における卓越性を強化して次のように述べる。

"・・・物質的と非物質的，理性的と非理性的，破壊的と非破壊的という二つの極にすべてのものは分類され，自分自身もこれらの両極の間に参与しているという一つの限界あるいは境界であるということを理解している。・・・外観を比較すると，ほとんど無限に変化する技術と道具を明示する知性の力とこれによって考察する観想的な諸々の学において，生成消滅するすべての事物的自然の上位にあり，それから全くほとんどいかなる比例関係もないほど隔たっていると自己を判断する。"（M-fgl．30；S-fgl．42v）

このように述べながらも，人間の生の原理は何かを求めて，感性と理性との間の矛盾を述べる聖パウロの言葉に従って，第一動因の理解不可能な崇高さ，あらゆるときに人間に起こる，諸々の不安，無限の不快さ，災難，食欲あるいは欲求の不安のうちに矛盾した選択をとる人間の性向を読み取る。しかしこの矛盾した性向について次のように述べる。

"人間は自然的に，永遠の生を有する実体と結びつけられたいという欲求を持ち，この欲求は空虚ではありえない，なぜならば，自然は必然性において欠除することはないゆえにいかなる表面的なことも空虚なこともしないからである。"（M-fgl．30v；S-fgl．43）

デイ・ジョルジョのこの考察は再びアリストテレスの思想に戻ってゆく。彼はいかなる技術（technē）、いかなる研究（metodos）も，おなじくいかなる実践（Praxis）や選択（Proailēsis）もことごとくなんらかの善を希求するとしてその終極目的を幸福（eudaimonia），よく生きていること，よくやっていることにみる。[注18]さらにこの善（agathon）は自足的であるとして，三様の卓越性（aretē），外的（富，名声等）身体的（健康，体力，容姿等），精神的（節制，有機，正義，きょう持，親愛，思慮，技術，理性等）を挙げる。このうち人間特有の機能は理（logos）を備えた精神の活動，働き

であり，これが人間の卓越性(aretē)であるとする。この精神の活動は習慣と習慣づけに基づく倫理的卓越性(ethikē)と学習に基づく知性的卓越性(dianoēthikē)にわけられる。前者は行為，実践活動にかかわる状態であり，標的(scopos)，準拠(horos)が存在し，それは中庸(mesotēs)を求める正しき理(orthotēs logos)に基づくとする。この理における必然的なものにかかわる知性による認識的と非必然的なものごとにかかわる実践による勘考的という二つの認識形態ををを分類する。さらに実践と真理解明をつかさどる機能として感覚(aisthēsis)，知性(dianoia)，欲求(orexis)を挙げ，感覚はいかなる実践の端緒ともならないとする。残る二者の関係として，知性の肯定と否定に欲求の追求と回避を類比し倫理的卓越性とは，思慮的欲求としての選択による精神の状態であり，これは目的的原理と欲求の選択としての行為実践によって遂行されるとする。[注19] 従って人間は，個別的なものごとにかかわることにより，実践にかかわる知性として，人間的な諸々の善に関して真となる理をもって行為しうる状態としての思慮と，理をそなえた制作できる状態としての技術と他の学的知性によって最高善，うるわしき生活（終極的に神的生活）を求めるとする。

ディ・ジョルジョは人間の生活について次のように述べる。

> "ディオニシウスのNomi Diviniに従えば，何らかの善は広がり流布すればするほどよくなる，続いて他の善へと適合された精神に正義が基礎づけられ，そこでは他のすべての徳（倫理的卓越性）はさらによく善自体を配慮するようになり，より一般的に流布しうるようになる。これは世界ではだれも避けることのできないあの永遠の鏡である，最も優れた完全性によるものである。・・・自然に各事物は完全な存在あるいは（不明瞭ながら）最高善を求める。"
> (M-fgl. 47; S-fgl. 17)

従って，ディ・ジョルジョにおける人間は，精神的には善に導かれる中間的な存在，最高善を追い求める存在として措定され，現実には思慮と技術に基づいて実践する存在である。しかし類似の理に基づいて，身体的には全世界の一般性を内在する小世界として措定される。このことはキリスト教神学におけるアダムの像と人間の身体の関連性において人間の身体が完全性を具現する場であるという次の言明に結びつけられる。

> "人間の本質は，存在する不調和の阻止，あるいはその治癒にとっても，我々の最初の祖先，神の喜んで創り給うたその似姿ほど適切なものはない。すなわちすべてのひとは一から生まれ，人々はその全体的特性の中での統一性を維持するよう促される。"[注20]
> (M-fgl. 10; S-fgl. 56v)

ディ・ジョルジョはこの言明やルネサンスにおける一般的思潮，特にクザーヌスやマネッティ[注21]による影響を受けて彼の"類似の理"によって形態上の人間の身体の完全性を述べている。しかし人間の事物的身体の完全性は，他の動物のように生誕時にすべての外的自然に抗する身体を持たないために，知性によって補完されるとしている。すなわち人間が自身のうちに知性と理性そして，器官の中の器官，道具の中の道具，としての手を有するということにおいて説明される。

このことは彼がしばしば用いる，必要性（必然性）(necessità)の理，あるいは"有用性(utilità)の理"によって説明される。個としての人間は，この有用性，必要性の理に従って，知性と理性に支えられる技術によって完全な身体に機能的尺度的に類似するものとして道具を制作する。すなわち身体の延長としての道具を制作する。さらにその道具の制作は先に述べた善へと導かれる。このことは建物，住居に即して説明されている。

まず，彼は人間の知性はすべての物質の中で最も高貴であるのと同様，非物質的で不滅な実体の中では最も不完全であると述べ，その理由を身体の住まいという牢獄のゆえに不完全であるとしている。・この身体的弱さにより様々な判断が生まれ，一つの真実に関する対立した意見，一つの結論に関する逆の概念，一つの目的に向かう様々の道が形成されると指摘し，それを一つの中心あるいは点にたとえている。こうして彼は建物，住居を築造するという事象に内在するふたつの方向，来世的禁欲的，現世的快楽的方向を確認する。前者は豪華な建物を建てること自体を否定する。その理由として長い期間と巨大な富を費やさねばならず，無用な心配に知性がとらわれねばならないことがあげられる。[注22] ペトラルカの詩の一節"悲しいかな，不条理な運命の下に生まれた人間はすべての動物は平穏であるにもかかわらず，休みなき人間は"を引用して上述の理由の一つの根拠としている。また古代の哲学者シモニデスの節度あるいはローマの道徳家達によって，福音書，旧約聖書等の権威から導き出された，人間の魂は不死であり，実人生にある人間は旅人であり従って質素な家に住まうべきであるという，地上の富，財産，豪華な家等にわずわされることのない善良で聖なる活動と観想の生活を送ることを根拠にしている。しかし，ディ・ジョルジョはこのような方向の存在を認めながらも，自然法則を前提として次のように述べる。

> "家々は均整がとれ快適に造られるべきである，というのは，すべてのものは当然自身に相応しい場所を求め，そこで安らぎを得る。人間は他の動物より

も節度があり，このため他のものより諸々の要素や過度の特性に攻撃されやすい，従って他の動物よりもより人工的な住居が必要であり，それは偉大な技術（術）によって構成されるだけでなく，彼に相似して均整化され相応しく構成される。・・・居住に伴う快適性同様，共有する多くの必要性の理由によってもこのような建物に費やされる富は無駄ではない。さらに我々の短く不確定な人生は，我々が真の理性によって自分自身のためだけでなくさらに後世の人々のためにも築造することを考察するならば，築造しないようには強制しない；この行為は善の属性である。”（M-fgl. 10;S-fgl. 57-57v）

こうして建物を壮麗に築造することの正当性が後世の人々に役立つ行為でありそれは善の属性であるということが結論づけられる。このことは再びアリストテレスの人間の幸福，善，最高善は必然的にその派生作用として二次的に快楽を伴うとして，快楽自体を否定していない[注23]ことに関連づけられる。知性，理性，技術，制作能力を持つ人間は，従って階層的な状態としての善に導かれ，さらに完全な身体（小世界）に即して，この身体の延長としての道具，家，建物を築造する。ディ・ジョルジョは善に導かれた人間としての建築家について次のように述べる。

“・・・建築家がもっぱら何らかの有用性あるいは栄光を人間にもたらすことによってのみ，築造し，制作するよう動機づけられていることは必然である。・・・従って，この有用性が世界において多大であればあるほど，その作品は耐久性があり，実り多い（幸福な）ものであるとするならば，建築家は，彼の意図的目的とその建物の像を持つだけでなく，満足のいく耐久性のある（生産的）な諸条理を把握しなければならない，そしてこれらに従って制作しなければならない„。（M-fgl. 10;S-fgl. 56v）

“建築家は彼の学識の範囲を超えることなく，自己の認識よりも意図的目的のうちにあるゆえに，幸運な天の影響の下にある精通した占星学者の判断を参照して，建物に原理を与えなければならない。„

彼はこのように述べることにより，建築家像を学的認識に支えられ，かつその意図的目的により建物に原理を与えるものとして措定している。このことは制作における建築家の自律性，さらには人間の自律性が確立する萌芽とみなされる。

さらに彼は有用性の理に従う個としての人間は，またその限定された生によって個人では行ない得ない事業あるいは制作等を協同するために共同体を形成する社会的動物であると規定する。この共同体が都市と呼ばれそこでは人間は，類似性（animale sociabile），秩序（ordine），差異性（多様性）（diversità），有用性という理に従って，統一体を作るとする，この統一体は，よりよい生活，完全で調和した生活，アリストテレスのいう完全現実態として措定されている。この都市の構成原理もまた類比的に，彼の類似の理に従って完全な身体の機能的側面から形成されている。

4．結　語

以上のことを結論づけるとまず全体の理論的構造においてアリストテレスの思想に多くを負っていることがあげられる。すなわち人間の生は現実にこそ善があり，この善は自然の秩序，不動の動者の生活，完全現実態へと一方向的に志向するものであり，それはまたアリストテレスの帰納的方法論によって導かれ個別的なものから普遍的なものへと志向する人間の生の現実である。こうしてすべての人間の知性的現実的活動は人間の幸福へと向けられる。

このような人間の生にかかわる実践的理論的活動を制作において支えるものとして，L'arte antigraficaは措定されている。すなわちそれは形相因（本質）としての秩序“必然性の理”に支えられ，認識の方法としての類比作用である“類似性と差異性（多様性）の理”を通じて目的因としての“有用性の理”によってもの（質量因）を制作する実践活動を支える善に導かれた実践理論であるとともに制作されるものに原理を与える上位の技術理論でもある。このことはantigraficaの意味を語源的に考察することによっても支えられる。この語がプリニウスからの引用であるゆえに[注24]一方でラテン語の接頭辞ante ー前，先んじて，超えてーと名詞 graphice ー図，絵画，素描，製図術ーの複合語として考えられる。従って図，絵画，素描，製図術に先んじることとしての意味を持つ。更にギリシア語の anti ー反，対立ーという接頭辞に置換されているためにそれらに対立することとしての意味を持つ。他方でギリシア語の antigraphe の意味に解釈するとそれは返答，反論，反証としての意味を持つ[注25]。こうしてこのL'arte antigrafica の意味も図に対立する術，あるいは図に先行する術，過去と現実に反証する術，すなわち制作することに原理を与える技術理論として考えられる。こうした意味で建築 architettura，絵画，素描術 l'arte del disegno もまたこの一部として考えられたものであろう。また実際に手稿の構成も図面部分と理論部分が対照的に置かれている。こうしてこのような制作するものとしての建築家もまたその制作されるもの（家，都市，城塞，道具）に原理を

与えるものとして措定されている。そしてこの原理はアリストテレスの思想とキリスト教神学に導かれて，完全な人間の身体の内に求められている。

注記）

1) 拙稿："Francesco di Giorgio 研究(1)・。・手稿序文について"，建築学会論文報告集第317号，1982。
2) R.Wittkower："Architectural principles in the age of Humanism"，1970。
L. Lowic："The meaning and significannce of Human analogy in Francesco di Giorgio" J. S. A. H. 1983，No.4
3) 拙稿：前出，前者をM，後者をSとする。
4) アリストテレス："形而上学"，1．1。980a
5) ロイド：アリストテレス，川田訳，みすず書房。
6) アリストテレス："形而上学"，lv. 1. 1025b 20
7) 同上："ニコマコス倫理学"，vl. 3. 1139b20
8) 同上：同上，vl. 4. 1140a14
9) 同上："形而上学"，1. 1. 981a-981b
10) 同上："ニコマコス倫理学"，lv. 4. 1139b
11) 同上："自然学"，ll. 3. 195a-b，"形而上学" 1. 3. 982a-984
12) 同上："自然学"，1. 1. 184a20
13) 同上："ニコマコス倫理学"，X. 9. 1180b20
14) 同上："形而上学"，vll. 13. 1038b
15) 同上：同上，xl. 9. 1065b20
16) アリストテレス："形而上学"，xll.
17) 同上：同上，lx. 6. 1048a30
18) 同上："ニコマコス倫理学"，1. 1. 1094a
19) 同上：同上，vl. 2. 1139a10
20) Thomas Aguinas；Summa Theologica, II. i. q. 81. a. 1
21) クザーヌスに関しては前出の拙稿参照，マネッティ（1396—1459）も又人間を小宇宙とみなしている。前出のLowicの論文参照。
22) Petrarca："Africa," vl. 897—9
23) ："ニコマコス倫理学"，ll. 4
24) 前出拙稿参照。
25) Oxford Greek—English Dictionary.